

注文の多い料理店

宮沢 賢治 文
小林 敏也 絵

1 二人のわかいしんしが、すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄ぼうをかっいで、白くまのような犬を二ひき連れて、だいぶ山おくの、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、歩いておりました。

2 「ゼンたい、ここの山はけしからんね。鳥もけものも一びきもいやがらん。何でもかまわな
いから、早くタンタアーンと、やってみないもんだなあ。」
「鹿の黄色な横っぱらなんぞに、二、三発お見まい申したら、ずいぶん痛快だらうねえ。くる
くる回って、それからどたつとたおれるだらうねえ。」

3 それはいぶの山おくてした。案内してきた専門の鉄ぼううちも、ちよつとまこついで、ど
こかへ行ってしまったくらい山おくてした。

4 それに、あんまり山がものすごいで、その白くまのような犬が、二ひきいつしよに目まい
を起こして、しばらくうなって、それからあわをはいて死んでしまいました。

「実にぼくは、二千四百円の損害だ。」

と、一人のしんしが、その犬のまぶたを、ちよつと返してみて言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」

と、もう一人が、くやしそうに、頭を曲げて言いました。

4 初めのしんしは、少し顔色を悪くして、じつと、も一人のしんしの、顔つきを見

ながら言いました。

「ぼくはもうもどろうと思う。」

「さあ、ぼくもちよつと寒くはなつたし、はらはすいてきたし、もどろうと思う。」

「せいじゃ、これで切り上げよう。なあに、もどりに、昨日の宿屋で、山鳥を十円も買って帰
ればいい。」

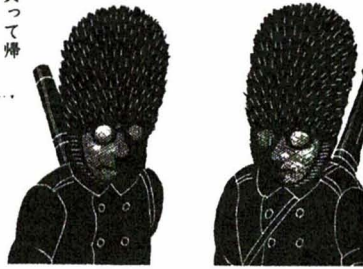
「うさぎも出ていたねえ。そうすれば結局おなじこつた。では帰ろうじやないか。」

5 ところが、どうもこまつたことは、どつちへ行けばもどれるのか、いつこう見当がつかなく
なっていました。

6 風がどうとふいてきて、草はザワザワ、木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。

「どうもはらがすいた。さつきから横っぱらがいたくてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまり歩きたくないな。」



二千四百円
現在でいうと、二百
万円から三百万円ぐ
らいに当たる。

損
ソソ

「歩きたくないよ。ああこまつたなあ、何か食べたいな
あ。」

「食べたいもんだなあ。」

7 二人のしんしは、ザワザワ鳴るすすきの中で、こんな
ことを言いました。

8 そのとき、ふと後ろを見ますと、りっぱな一けんもの西
洋造りのうちがありました。

9 そして、げんかんには、

RESTAURANT
西洋料理店
WILDCAT HOUSE
山猫軒

という札が出ていました。

「君、ちよつどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじやないか。」
「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだらう。」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじやないか。」

「入ろうじやないか。ぼくはもう何か食べたたくてたおれそうなんだ。」

10 二人はげんかんに立ちました。げんかんは白い瀬戸のれんがて組んで、実にりっぱなもんで
す。

11 そしてガラスの開き戸がたつて、そこに金文字でこう書いてありました。

【どなたもどうかお入りください。決してこえんりよはありません。】

12 二人はそこで、ひどく喜んで言いました。

「こいつはどつだ。やっぱり世の中は

うまくてきてるねえ。今日一日なん

ぎしたけれど、今度はこんないこ

ともある。このうちは料理店だけ

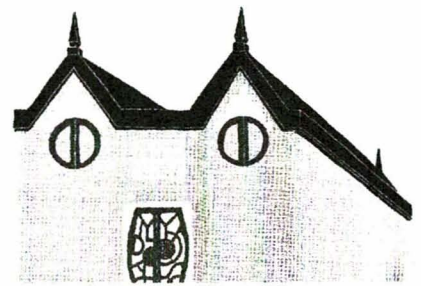
ども、ただでこちそうするんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してこえん

りよはありませんというのはその意

味だ。」

13 二人は戸をおして、中へ入りました。



西洋
造
ソソ



そこはすぐろう下になっていました。そのガラス戸のうら側には、金文字でこうなっていました。

14 二人は大かんげいというので、もう大喜びです。
「君、ぼくらは大かんげいに当たっているのだ。」
「ぼくらは両方かねてるから。」

15 ぜんぜんろう下を進んでいきますと、今度は水色のペンキぬりの戸がありました。
「どうも変なうちだ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」
「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

16 そして二人はその戸を開けようとして、上に黄色な字でこう書いてありました。
【当軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこは承知ください。】

「なかなかやってるんだ。こんな山の中で。」

「それあそだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りには少ないだろう。」

17 二人は言いながら、その戸を開けました。すると、そのうら側に、

【注文はぜひぶん多いでしょうが、どうかいちこらえてください。】
「これはぜんたいどういうんだ。」

18 一人のしんしは顔をしかめました。

「うん、これはきつと注文があまり多くて、したくが手間取るけれどもごめんくださいと、こ
ういうことだ。」

「そうだろう。早くどこか部屋の中に入りたいもんだな。」

「そしてテーブルにすわりたいたいもんだな。」

19 ところが、どうもうるさいことは、また戸が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかっ
て、その下には長いえの付いたブラシが置いてあったのです。

20 戸には赤い字で、
【お客様がた、ここてかみをきちんとして、それからほき物のどろを落としてください。】
と書いてありました。

「これはどうもきつとだ。ぼくもさつきげんかんで、山の中だと思つて見くびつたんだよ。」
「作法のきびしいうちだ。きつと、よほどえらい人たちが、たびたび来るんだ。」

21 そこで二人は、きれいにかみをけずつて、くつのどろを落としました。

22 そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くやいなや、そいつがぼうつとかすんでなくなつ
て、風がどうつと部屋の中に入ってきました。

23 二人はびっくりして、たがいによりそつて、戸をガタンと開けて、次の部屋へ入っていきます

*見くびる

した。早く何か温かいものでも食べて、元氣をつけておかないと、もうとほうもないことになつ
てしまうと、二人とも思つたのでした。

24 戸の内側に、また変なことが書いてありました。
【鉄ぼうとたまをここへ置いてください。】

25 見ると、すぐ横に黒い台がありました。
「なるほど、鉄ぼうを持つてものを食うという法はない。」

26 「いや、よほどえらい人が始終来ているんだ。」

27 二人は鉄ぼうを外し、帯皮を解いて、それを台の上に
置きました。

28 また黒い戸がありました。

【どうかぼうしと外とうとくつをおとりください。】

29 「どうだ、取るか。」

「しかたない、取ろう。確かによつぽどえらい人なんだ。」

29 二人はぼうしとオバコートをかきあげ、くつをぬ
いてベタベタ歩いて戸の中に入りました。

29 戸のうら側には、
【ネクタイピン、カフスポタン、眼鏡、さいふ、その他金物類、ことにどがつたものは、
みんなここに置いてください。】

と書いてありました。戸のすぐ横には、黒ぬりのりつばな金庫も、ちゃんと口を開けて置いて
ありました。かぎまでそえてあつたのです。

30 「はあ、何かの料理に電氣を使うとみえるね。金氣のものはあぶない。ことにどがつたもの
はあぶないと、こいうんだらう。」

31 「そうだろう。してみると、かんじようは婦りにここてはらうのらうか。」

32 「どうもそうらしい。」

「そうだ。きつと。」

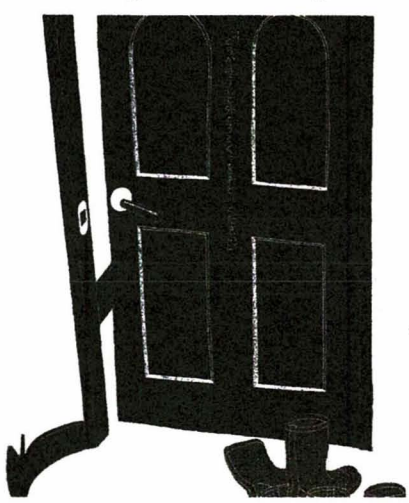
30 二人は眼鏡を外したり、カフスポタンを取ったり、みんな金庫の中に入れて、パチンとじよ
うをかけた。

31 少し行きますとまた戸があつて、その前にガラスのつばが一つありました。戸にはこう書い
てありました。

【つばの中のクリームを顔や手足にすつかりぬってください。】

32 見ると確かにつばの中のもののは牛乳のクリームでした。

*とほうもない



帯皮
皮靴の帯のこと。

オバコート
オバコート

眼鏡
めがね

じよう
戸やふたなどに取り
付けて開けられない
よつにする金具

「クリームをぬれというのはどういうんだ。」
「これはね、外が非常に寒いだろう。部屋の
中があんまりあたたいとひびが切れるか
ら、その予防なんだ。どうもおくには、よ
ほどえらい人が来ている。こんなことで、
案外ぼくらは、貴族と近づきになるかもし
れないよ。」

33 二人はつぼのクリームを顔にぬって手に
ぬって、それからくつ下をぬいて足にぬりま
した。それでもまだ残っていましたから、そ
れは二人ともめいめいこっそり顔へぬるふり
をしながら食べました。

34 それから大急ぎで戸を開けますと、そのうら側には、
【クリームをよくぬりましたか、耳にもよくぬりましたか。】
と書いてあって、小さなクリームのつぼがここにも置いてありました。
「そうそう、ぼくは耳にはぬらなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。この主人
は実に用意周到だね。」

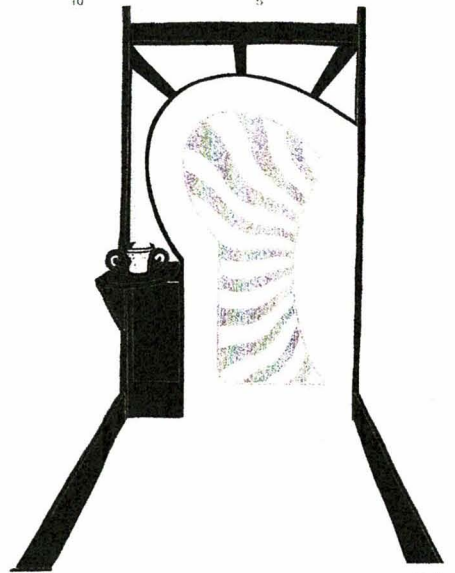
「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところで、ぼくは早く何か食べたんだけど、どうも、
こう、どこまでもろう下じやしかたないね。」

35 すると、すぐその前に次の戸がありました。
【料理はもうすぐできます。十五分とお待たせは
いたしません。すぐ食べられます。早くあなた
の頭にびんの中のこう水をよくふりかけてくだ
さい。】

36 そして戸の前には、金びかのこう水のびんが置いて
ありました。

37 二人はそのこう水を、頭へバチャバチャふりかけました。
38 ところが、そのこう水は、どうもすのうなにおいがするのでした。
「このこう水は変にすくさい。どうしたんだろう。」
「まちがえたんだ。下女がかぜでもひいてまちがえて入れたんだ。」

39 二人は戸を開けて中に入りました。
40 戸のうら側には、大きな字でこう書いてありました。



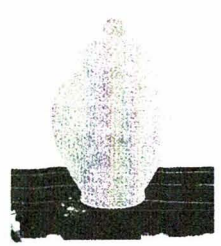
防 非
ごまかす
ヒ

「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でし
た。もうこれだけです。どうか、体中に、つぼの中の塩をた
くさんよくもみこんでください。」

41 なるほどりつばな青い瀬戸の塩つぼは置いてありましたが、今度
という今度は、二人ともぎよつとして、おたがいクリームをたく
さんぬった顔を見合わせました。
「どうもおかしいぜ。」
「ぼくもおかしいと思う。」
「たくさんの注文というのは、向こうがこつちへ注文してるんだよ。」
「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人に食べさ
せるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやるうちと、こういうことなんだ。こ
れは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」
「あなたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。
「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」
「あなたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。
「にげ……。」

42 したがたしながら、一人のしんしは後ろの戸をおそうと
しましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。
43 おくの方にはまだ一枚戸があつて、大きなかぎあなが二
つ付き、銀色のホークとナイフの形が切り出してあつて、
【いや、わざわざご苦労です。たいへんけつこうにて
きました。さあさあ、おなかにお入りください。】
と書いてありました。おまけに、かぎあなからは、きよろ
きよろ二つの青い目玉がこつちをのぞいています。
「うわあ。がたがたがたがた。」
「うわあ。がたがたがたがた。」
「うわあ。がたがたがたがた。」

44 二人は泣きだしました。
45 すると、戸の中では、こそこそこんなことを言っています。
「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」
「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかっ
たでしょう、お気の毒でしたなんて、まぬけたことを書いたもんだ。」
「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、ほねも分けてくれやしないんだ。」



毒
ドク

一分は約三ミリメー
トル。
ホーク
フォーク

「それはそうだ。けれども、もしここへあいつらが入ってこなかったら、それはぼくらの責任だぜ。」

「よぼうか、よぼう。おい、お客さんがた、早くいらつしやい。いらつしやい。いらつしやい。」

お皿もあらってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんでおきました。あとは、あなたがたと、菜っ葉をうまく取り合わせて、真っ白なお皿にのせるだけです。早くいらつしやい。」

「へい、いらつしやい、いらつしやい。それともサラダはおきらいですか。そんならこれから火をおこしてフライにしてあげましょうか。とにかく早くいらつしやい。」

二人はあんまり心をいためたために、顔がまるでくしくしやの紙くずのようになり、おたがいその顔を見合わせ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

46 中では、フツフツと笑って、またさげんています。

「いらつしやい、いらつしやい。そんなに泣いては、せっかくのクリームが流れるじやありませんか。へい、ただいま。じき持つてまいります。さあ、早くいらつしやい。」

「早くいらつしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフを持って、したなめずりして、お客様がたを待つていられます。」

47 二人は、泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

48 そのとき、後ろからいきなり、

「ワン、ワン、グワア。」

という声が出て、あの白くまのような

犬が二ひき、戸をつき破って部屋の中に飛びこんできました。かぎあなの目

玉はたちまちなくなり、犬どもはウー

どうなつてしばらく部屋の中をぐるぐる回っていました、また一声、

「ワン。」

と高くほえて、いきなり次の戸に飛び

つきました。戸はガタリと開き、犬どもはすいこまれるように飛んでいきま

50 その戸の向こうの真っ暗やみの中で、

「ニャアオ、クワア、ゴロゴロ。」

という声が出て、それからガサガサ鳴りました。



責 せき
任 じん
ニニ
まか
まか

サラダ

ナフキン
破 へ
ハハ
ハハ

52 見ると、上着やくつやさいふやネクタイピンは、あつちの枝にぶら下がったり、こつちの根元に散らばったりしています。風がどうとふいてきて、草はザワザワ、

木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。

53 犬がフーどうなつてもどつてきました。

54 そして後ろからは、

「だんなあ、だんなあ。」

とさげぶ者があります。

55 二人はにわかになが気がついて、

「おうい、おうい、ここだぞ、早く来い。」

とさげびました。

56 みのぼうしをかぶった専門のりよう師が、草をザワザワ分けてやつてきました。

57 そこで二人はやつと安心しました。

58 そしてりよう師の持つてきただんごを食べ、とちゅうで十円だけ山鳥を買つて東京に帰りま

59 した。

しかし、さつきいっぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰つても、お湯に入つても、もう元のとおりになおりませんでした。



枝 えだ
師 シ
みのぼうし